

インドネシアの歌(6)

沈黙の証人編

恋愛中の約束は証拠力なし

ナツメロの中でもよく知られている曲で Angin Malam(夜の風)という歌がある。Diiring gemuruh angin, meniup daun-daun, Alam yang jadi saksi, kau serahkan jiwa raga(風はビュービューと木の葉をゆらしていた、自然が証人になってくれるよ、あなたが身も心も委ねたことを)と恋人の心が離れたことを歎いている男ごころを歌っている。若者の恋は秘めごと、他人の目を避けているので、目撃者は大自然の放浪者である風しかいなかった。恋人の心変わりを訴えても、風は返事をしてくれない。

また、作者不明なのだがよく知られたナツメロ曲に Bunga Anggrek (蘭の花)という歌があり、Engkau cinta kepadaku, Bulan menjadi saksi, Engkau telah berjanji sehidup semati(あなたは私を愛してくれただわ、お月様が照明してくれるもの、生涯愛すると約束したじゃないの!)と愛の恨み節。これは、男か女がよく判らないが、後半に代わりの恋人が出来たのね、と出てくるのでやはり女の恨み節であろう。前述 Angin Malam では嵐の夜が証人となっているが、この Bunga Anggrek は証人がお月様でいかにも女性らしい。

ジャンルとしては、ポピュラー曲に入り、ラグラグ会としては歌える人は数えるしかないが Biarlah Bulan Bicara (お月さんの話を聞いてやってよ)という歌がある。Biarlah bulan bicara sendiri, biarlah bintang kan menjadi saksi, takkan kuulangi walau sampai akhir nanti … (お月さんに聞いてみて、お星さんだって証人になってくれるよ、私は二度と過ちを繰り返さないよ)と、これは男性が女性に謝っているようだ。さて、今度は星が証人になっている。

以上3曲の例では、愛の約束を見守っていたのはいずれも夜の自然である。「人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んでしまえ」ではないが、闇の中の目も片目を瞑って恋人達を祝福していたのだろう。これが、面白い見世物的なものでもあるなら闇の中からうんかの如



く見物人が湧いて出て来るところだろうが。

さて、インドネシアの歌では janji(約束)は必ずと言っていいほど diingkar (反故にされる)のが相場だ。順調な恋愛は詩にはならないのであろう。「約束とは破られるためにある」なんていうと、お叱りを受けそうだが、アラブ人は人に何か頼まれたときは頼んできた人を失望させるのは悪いから、とにかく「よっしゃ、よっしゃ」とその場は肯定的な返事をする。以前、本で読んだことがある。この「よっしゃ、よっしゃ」はインドネシア語の besok(明日)に相当するようである。ご用心! besokは、明日のまた明日、またその明日でもある。

よく聞くのだが、社会通念として、インドネシアでは女性にとって離婚再婚はバツイチではなく、より多くの男性に愛されたと言うことでむしろ勲章であるとか。今なおそうなのかと聞かれても本当のところは分らない。確かに欧州の列強が南太平洋に群がり集まった大航海時代を記した本によると、南方民族の性に関するおおらかさは彼らをも驚かしたようではある。真偽の程は分らないが、ハワイ諸島のフラダンスは男を虜にする技術であるとか、ないとか…。

それはさておき、恋の証人は二人の心の中以外にはなにも語ってくれない。やれ月が見ていた、風が聞いていたと言っても第三者は誰も信用してはくれないのである。ナツメロの中でも特に有名な Selendang Sutra (絹の肩掛け)、Sapu Tangan (ハンカチ)の歌の中では肩掛け、ハンカチをプレゼントされるのだが、やはり恋人に捨てられた後は心の傷を癒す包帯となるだけで、去っていった人を連れ戻すことは出来ない。と言うよりは呼び戻さないようである。このような歌が多いというのは、国民性として結婚するまでは nasib (運命) 論者であるのだろうか? 所謂社会性なのだろうか? 作詞者にマゾヒズム傾向があるのだろうか? ブラックユーモア的に言えば、歌を聴く側が「他人の不幸を喜んで、相対的に自己の幸せを噛み締めている」のだろうか。

お月様が一番良く知っている。英語で“神(のみ)が知っている”という表現は「人間は誰も知ることが出来ない」という意味のようだ。歌ではないが、想いは墓までお伴させようっと!
(渡辺重視)